

教文通信 No.5 (電子版)
松川高校・理科学研究会・教文
運営委員会報告

教文通信 No.6 (電子版)
「学びの『指標』(案)」討
議資料

教文通信 No.7 (電子版)
支部教研特集

教文通信 No.8 (電子版)
支部教研特集

教文通信 No.9 (電子版)
家庭科教育研究会県との懇
談会

教文通信 No.10 (電子版)
新年のご挨拶

教文通信 No.277 (紙版)
「コロナ後の教育はどうあるべきか」
勝野 正章さん
(東京大学教授)

教文通信 No.278 (紙版)
「資質・能力」論批判と教育評
価のあり方について
佐貴 浩さん
(法政大学名誉教授)
「教育は何を評価してきたのか」
本田由紀さん(東京大学教
授)講演会の報告

*教文通信は、教文 HP の会員
専用ページでご覧になれます。

また、コロナ禍の状況の中で女性の自死が急増。飲食・旅行観光業といった女性労働者が多い産業を直撃したため、女性の失業率は公式には 72 万人。「新しいフェミニズム」の流行の次には女性の自死が来るかも。この女性にとって厳しい状況が、一般的には男女における格差とは捉えられていない。要因は日本社会の中にある。

2 日本のジェンダーの実態 賃金格差

平成 25 年厚生労働省のデータによると、男性一般労働者の給与水準を 100 とした場合、女性一般労働者は 72.2% である。世界的にみて先進国で、この格差は群を抜いている。また、男性一般労働者に対して短時間労働者は男性 55.1%、女性 50.7% で、非正規の中でも男女格差が存在する。さらに、非正規が増えていると社会問題になっているが、それは男性の非正規の割合がこの 20 年で 4.7% から 21.9% になったことを指しており、女性労働者の 55.5% が非正規であることは注視されておらず、ジェンダーの問題とは捉えられていないことへの腹立たしさがある。また、政治の世界でも国会議員の女性の占める比率は 2015 年の資料によると、9.5% で世界でも最低レベルである。

1990 年代、ジェンダーに関する取り組みや運動が進み、1999 年、「男女共同参画社会基本法」制定。それまでの女性運動をより国政レベルで確立した成果でもあった。それを受け、自治体で条例作りが進められた。そのような進歩的な変化に対する反対する動き(バックラッシュ)も強まっていった。

「バックラッシュ」とは一定の進んだ社会が「進歩的」変化に対して生じる反動現象と定義される。具体的には性別役割分業や「男らしさ」「女らしさ」を肯定し、広めようとする思想・価値観のための運動、夫婦別姓反対運動、「慰安婦」問題への攻撃、ジェンダー教育への抗議など。これらバックラッシュと「戦争できる国」作りの運動や政治との関連が懸念される。

日本における法制化は、正規・非正規の格差はそのままにし、男女差別を禁止したわけではない。一般職と総合職というコース別雇用を導入したことで、実質的にさらなる差別を生んでいる。競争をサバイバルしていく一部の女性を支援するために作られた 1985 年制定の「男女雇用機会均等法」から発展させたのが、「男女共同参画社会基本法」であり、雇用以外の社会のあらゆる分野にも参画せよというものである。結果、男女格差のみならず、大きな「女性格差」を生むことに。また、派遣法の制定により派遣社員には常用型と登録型に分かれ、男性は 8 割近くが常用型、女性の過半数が登録型となっている。

これら法制化が進む中で、ジェンダーの問題は見えにくい。格差をもたらしているにも関わらず、同時にジェンダーフリーへのバックラッシュが同時に進行しているという矛盾。それを可能にしているのは、「(男女平等は達成されたから)フェミニズムは古い」、「フェミニズムは女性の甘え」「フェミニストは男になりたい女性」という言説。

3 世界的なネオリベリズム ポストフェミニズム

80 年代までに、フェミニスト達が勝ち取った成果に対するバックラッシュとは別に、若い女性及び大きなマスメディアなどを中心にした反フェミニスト的感情によって特徴づけられる、社会的文化的状況がある。「エンパワーメン



ト」や「選択」といったフェミニズムで使われた言葉が、より個人的な言説へと転換し、フェミニズムに対する激しい拒否や告発が広がり、SNS上でもバッシングのサイトが増えている。そのような「ポストフェミニズム」はネオリベラリズム（新自由主義）下における世界的な現象である。

第二次世界対戦～1970年代まで、ネオリベラリズム以前の日本においては、正社員中心の雇用システムの中で、高度・安定成長を補完するため、夫は仕事、妻は家事という性別役割分業家庭を中心とした社会であり、会社が福祉を代替してくれるというジェンダー秩序的福祉国家であった。その後、社会が新自由主義化されていく中で、雇用の流動化・不安定化が起こり、公的セーフティネットは縮小、福祉や教育、医療等の公的支出の削減と民営化が図られ、社会的再生産の私企業化が進んだ。

それでは、新自由主義はジェンダーにどのような影響を及ぼしたのか。何より労働市場への女性の導入を増大させることになった。それは競争できる一部のエリート女性の登用を意味し、民営化された医療・福祉・介護などエッセンシャルワーカーの割り当てが進んだ。その結果、男女格差の拡大に繋がった。2015年「女性活躍推進法」が制定されたが、この法律は男女平等よりも効率、競争を優先させる意識を植え付け、女性を利用・活用させようとするものである。小泉内閣からの構造改革の一環であり、大いに新自由主義的であった。

4 若い世代のジェンダー意識・性別役割分業意識変化

性別役割分業に「賛成」「どちらかといえば賛成」の割合は1992年、60,2%だったのが、2002年47,0%、2007年44,8%と徐々に下がっていった。ところが、2012年の調査では再び51,6%に上昇し、性別役割分業を肯定する人の方が多数派となっている。特に若い世代の意識変化が大きい。

4.若い世代のジェンダー意識
性別役割分業意識の変化

- 性別役割分業に1992年「賛成」の割合（「賛成」と「どちらかといえば賛成」）60.1%⇒この割合は徐々に低下し、2002年47.0%、07年には44.8%
- とところが、12年の調査結果では再び賛成割合が51.6%に上昇し、性別分業を肯定する人の方が多数派に反転
- 若い世代の意識変化！

その要因は、劣化する労働環境において、専業主婦家庭への憧れが強まっている、バッククラッシュの影響を受け競争や効率が強調される新自由主義社会の中での「伝統的な」価値観や生き方への懐古など。流行語の中にもそれは現れる。酒井順子は仕事ができても結婚できない、夫や子どもがいない女性を「負け犬」と名付けた。また、「草食系男子」は肯定的な意味から否定的な意

味へと変化し、「女子力」が女性を評価する言葉として定着しつつある。

しかし、本当に「女子力」は女性を評価する言葉といえるのか。大学で行った調査によると、男女ともに「女子力」という言葉に対して肯定的なイメージを持っている。また、「女子力」という言葉は内面と外見どちらを重視しているのか、という質問に対して「内面」という答えが女性73%、男性87%であり、女性の内面的なイメージとして捉えている。ところが、自由記述によると、その内容は家事能力、服装やメイクなどの外見の美、マナーなどと認識されている。「内面」に重きが置かれているのと、一見矛盾するようだが、家事や外見の向上のために努力することと認識されていると考えれば矛盾しない。美や家事能力向上のために日常的に自発的に管理されようとする心身のあり方、内面性が「女子力」なのだ。

これは、あらゆる社会構成員にトップを目指して競争に邁進することを要請するネオリベラリズムの思想を体現した語彙といえないだろうか。そういう意味で「女子力」はポスト近代思想の代表例だとみなせる。また、「女子力」を向上させることにより、「恋愛」や「男性との関係」「結婚」などで有利になると考えられており、基本的にヘテロセクシュアルな「男性」中心的価値観の中にある。しかも、「女性が輝く」等、女性性を肯定、鼓舞するメッセージであるため、フェミニズム的な価値と混ざりやすい。

前述の「家事」「外見」等の保守的なジェンダー規範意識と努力、能力等の新自由主義的価値観が結合し「女子力」などのジェンダー化された流行語が生まれたといえる。さらに、その背景の一つとして、「少子化」問題による「産む」ことがよいことという価値観が強化し、結婚・子育てすると同時にキャリアを確立するのは「現代の女性」像というプレッシャーがジェンダー論の最新の課題である。「女性も活躍できる社会」というイメージとは裏腹に、保守的な役割分業意識やジェンダー規範が新しい形で強化されている状況を「ネオリベラル・ジェンダー秩序」という言葉で表したい。

若い世代における保守的意識と新しさ、迷い

- 「家事」「外見」等の保守的なジェンダー規範意識
- 努力、能力等の新自由主義的価値観
- 古さと新しさの混在、結合＝「女子力」などのジェンダー化された流行語
- 背景 「少子化」問題による「産む」ことが良いことという圧力の強化、結婚・子育てすると同時にキャリアを確立するのが「現代の女性」像というプレッシャー⇒ジェンダー論の最新の課題
- ※ 「女性も活躍できる時代」という世間のイメージとは裏腹に、保守的な役割分業意識やジェンダー規範が新しい形で強化されている
- ＝ネオリベラル・ジェンダー秩序

5 これからの構想

日本におけるバックラッシュと「戦争できる国」づくりの運動や政治との関連で懸念されることがある。自民党憲法調査会憲法改正プロジェクトチームの論点整理（案）の憲法24条の見直しである。その中で、「家族重視」の規定

（「家族を扶養する義務」規定と「国家の責務として家族を保護する」規定の新設と「両性の平等」の見直し）がセットとなっている。

また、一 가족의 扶養義務は実質的には主に女性に課される性別役割分業、男性には「国の防衛、非常事態への国民的協力義務」（同整理案より）。つまり、愛国主義・ナショナリズムの強化がこの見直し案の主旨である。このことが一般に認識されていないことも、大きな問題である。

また、アメリカにおいては、トランプの登場はネオリベラリズムへのバックラッシュが生じていることを意味している。それは、女性蔑視・性差別発言、中絶禁止政策、7 貧困女性・移民女性への抑圧に繋がっている。同時にヒラリークリントンのようなエリートのネオリベラリズムに象徴される、「リーン・イン・フェミニズム」が存在する。アメリカにおいて「進歩的なネオリベラリズム」とは金融重視・保健政策の民営化、戦争政策を意味する。この状況は世界的なバックラッシュとネオリベラリズムの支配とが重なって起きている。

6 「99%のためのフェミニズム」

世界的なバックラッシュとネオリベラリズムの支配に対して、様々な動きが起きている。2017 年全米で 500 以上の都市でアメリカ史上最大の「ウイメンズマーチ」。さらにトランプ個人に対してではなく、構造的な問題を主張するために「ウイメンズストライキ」。2016 年 10 月、ポーランドで右派ポピュリスト政権による中絶禁止政策への反発が世界へ広がる。2016 年 3 月スペインでフェミニスト・ストライキなど。

それらの動きは 2019 年出版ナンシー・フレイザー著「99%のためのフェミニズム」の中にヒントがある。「99%のためのフェミニズム」とは、「リーン・イン・フェミニズム」（リベラルフェミニズム）との決別であり、人権主義、能力主義、植民地主義への批判である。そして、環境破壊とフェミニズムのつながりを取り戻すことに繋がっている。

6. 「99%のためのフェミニズム」

- ・ 2017年1月21日全米500以上の都市でウイメンズ・マーチ アメリカ史上最大
- ・ ↓
- ・ さらに構造的な問題を主張するために3月8日ウイメンズ・ストライキ
- ・ 2016年10月ポーランド 右派ポピュリスト政権による中絶禁止政策への反対→世界に広がる
- ・ 2018年3月8日スペイン フェミニスト・ストライキ
- ・ 2019年A Manifesto出版
- ・ 2020年日本語版出版

最後に、ジェンダーやフェミニズムをめぐる現代の日本社会は想像以上に複雑な状況にある。バックラッシュ、ポストフェミニズムを経てのコロナ禍である。政治・経済・家庭における男女格差や分業、役割は健在で、しかも見えに

くいし認知されていない。さらに、若い世代は保守化の傾向が見られる。ナショナリズム・レイシズムとの結びつきをどう考えていけばよいのか。混乱し、混迷している現在を理解し、これからをどう構想するのか。そのさい、「99%のためのフェミニズム」の視座を手がかりに考えていきたい。

高校現場で若い世代と向き合っている先生方には、この状況を認識して、日々の実践に生かしていただきたい。そして、何より、この厳しい状況を生きていく彼らをいつも見守っている、というメッセージを伝えていただきたい。

(常任委員 中村 富貴子)

2. 菊地夏野さん講演会 感想集

◆◆ネオリベに操られている風潮、世論、更に拡大する格差がはっきり理解できました。女女格差、誹首される不規則な雇用の皆さん、色々な現実が世界で日本で感染症の拡大のもと、多数の弱者が固定され増加し、怒りが人びとの分断に進んでいることを講演から感じました。菊地先生がいう高校教師というエリートも休職したり、御逝去のお知らせを受けたりで、なかなか、病める立場にあります。大学生を孤立化させ本来、楽しむべき学生生活を、停止している事は、たぶん、今回の講演に関係ないかもしれませんが、人数では200万人位いるはずで、それを無視しているとは言えませんが、その事を触れもせず、大学進学指導している事が正しいのか、今、疑問を感じます。(伊那北高校 望月映)

◆◆フェミニズムに関心はあったものの、不勉強だったので、改めてポストフェミニズム、ネオリベリズムとの関係が整理でき、想像以上に簡単には抜け出せない深みにはまっている現状も理解できた気がします。

ジェンダーギャップ指数が昨年世界121位になってしまった日本。教育面での男女格差は小さいため、学校にいる間は女性差別を実感できないけれど、就活・就職で実社会に足を踏み出した瞬間から大きな格差の中に突然放り出されるため、うまく行かないのはジェンダーギャップのせいではなく、自分のせいだと感じてしまう場合も多いという話は考えさせられました。

比較的恵まれた立場にいる私たち教職員自身が圧力にもなりうることを自覚しつつ、これから社会に出て行こうとしている生徒たちに、知識や問題意識とともに「味方はここにもいるよ」というメッセージを伝えていきたいです。(伊那北高校 内山由香里)

◆◆菊池夏野さんの講演で、近年のジェンダーをめぐる状況を解説していただいた。「家庭基礎」「家庭総合」では、教科目標として「様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成することを目指す」とあり、教科

書は、「ジェンダーにとらわれない自分らしい生き方」「性的自立に重要なリプロダクティブ・ヘルス/ライツを主体的に行使する」など、ジェンダー教育に関する言葉が太字で示されている。「家」制度の歴史や、無償労働の実態、女子労働力率の海外比較のグラフ等を授業で扱い、生徒の生活設計にジェンダー平等の意識を身につけて欲しいと思っている。コロナ休校中、更埴支部家庭科研究会で実施した家事労働に関するアンケート調査では、家事参加の男女差はそれほど大きくなり、高校生には男女格差の実感はあまりないようだ。しかし、社会に出ると、男女の賃金格差、女性の過半数は非正規、「女子力」の言葉の奥に潜むもの、「女女格差」…様々な問題がある。若い世代の保守化もみられると聞いた。「少子化」と「女性活躍社会」で、結婚・子育てすると同時にキャリアを確立するのが「現代の女性」像というプレッシャーが、ジェンダー論の最新の課題で、日本のジェンダー秩序はまだまだ強固とのことだ。資料をいただいたが専門的な用語が多く難解だった。著書を購入して勉強し、生徒たちに問題を投げかけ共に考える授業を計画したい。生徒には、人生100年時代に向けて、固定観念に流されることなく、男女とも自分らしい人生を送って欲しいと思った。（坂城高校 櫻井幸子）

◆◆特にネオリベリズムとポストフェミニズムの関係について、大変勉強になりました。ありがとうございました。私自身、ジェンダーに関する問題は多様化しているし、現状で「女性」を取り出して差別について考えるのは適切なのか（「自分らしさ」をいかに追求するかという問題に回収されつつあるんじゃないか）という疑問をもっていました。今回の講演を聴き、そういう風に視点を個人の問題に持ってってしまうこと自体に危機感を覚えました。

私の接する生徒の多くは男女差別を「取り扱いの差」くらいに捉えているように感じますし、家族関係の不和や経済的困窮といった目の前の個別の課題に追われている彼らが構造的な問題に目を向けるのはすごく難しい問題だと思います。どうしたらいいのか、また学び、考えていきたいです。

（匿名希望）